バルラームとヨサファート

渡邊愛子

佛教の南北両伝は正確には東南、東北伝と称すべきものである。印度の西には中近東を介してヨーロッパ大陸が地続きに連なる。そこは基督教世界ではあるが印度と、若しくは佛教と没交渉ではなかった。《ミリンダ・パンハー》に於ける印度とギリシャとの接触は周知の通りであるが、ここに今ひとつ、基督教の文献中に佛教の痕跡を認めざるを得ない事実が存在する。《バルラームとヨサファート》がそれである。

これは中世基督教世界に《天路歴程》[1]同様広く愛読された聖者伝である。このバルラームはサンスクリット Bhagavān の、ヨサファートは Bodhisattva の転訛[2]であり、「佛と菩薩」ということになる。

この物語に関する諸論文[3]によって物語の伝播の経路を辿り、かつ文化史的に興味深い点を最初に、次に幸い入手し得たギリシャ本[4]、グルジア本[5]と佛伝等の佛典[6]との共通点を紹介しよう。尚、《バルラームとヨサファート》の存在を知ったのは雑誌『心』所載中村元教授「西洋中世と印度文化」による。

この物語の伝播の模様を跡づけることは難業であり、まだ定説は樹立されていないが、既に発表された諸論文をまとめると概ね次の様である。

《バルラームとヨサファート》が佛伝に基くことは諸論の一致する所であり、後に述べるように筆者自身ギリシャ本、グルジア本によって確かめ得た。

元になった佛伝を《ブッダ・チャリタ》とする説が大勢を成すが、《ラリタヴィスタラ》或いは初期の或るプラークリット又はマガダ語の佛伝という主張もある。

いずれかの佛伝に基いて《バルラームとヨサファート》という基督教聖者伝に翻案された最初がパーレビ本であるという既説に対し、I. V. Abuladze 氏は、その前にマニ教徒がトルコ語で書いていると指摘する。これに関する報告は R. Manselli 氏の論文に詳しい。

ところでパーレビ語に訳されたのはイランルネッサンス、即ち Khusrau Anushirvan 王の治世（531～579）であるが、この極めて重要なパーレビ本は現存しない。現存しないパーレビ本が基督教に置き換えられていたという推定が等しく行なわれているがその根拠についてはいずれの論文も沈黙している。

ともかく六世紀頃に成立したパーレビ本は続いてシリア訳された。その年代を A. S. Geden 氏は六世紀初頭とするが、パーレビ本の成立が五三一年以後であろうという彼自身の説に矛盾する。そこでこの年代は I. V. Abuladze 氏の六世紀から七世紀の間となる。

パーレビ本から翻訳されたのはシリア本及びアラビア本であり、アラビアルネッサンスの開花期、マホメットの叔父 Abbasia Caliph（八～九世紀）の時代に成立している。

シリア本からギリシャ本、グルジア本が成立したという従来の説は D. M. Lang 氏によって否定され、グルジア本はアラビア本の翻訳であることが判明した。

ギリシャ本はシリア本からの訳であるというのが定説であった。理由は他の印度のものがこのルートを経ていることによる。そしてその成立は六世紀初頭と推測されてきた。それはギリシャ本の中で世界の宗教を列挙する際にマホメット教が登場しないので六世紀から七世紀にかけてのマホメット教成立以前と考えられたものである。しかし後に述べるようにギリシャ本はグルジア本の訳であることが判明し、世界の宗教を列挙する部分はグルジア本には無く、ギリシャ訳の際に《アリスティデスの弁明》[7]を引用したこともわかった。《アリスティデスの弁明》は二世紀の作でありマホメット教が言及されない理由も解けた。そこでギリシャ本六世紀初期成立説は根拠を失うことになる。

更に新しい事実が発見された。或るギリシャ本のマヌスクリプトの見出しに「これはグルジア語からギリシャ語に翻訳されたもので、この仕事はアトスの Euthymius（955～1028）によって成された」と記されている。

一方ギリシャ本は七～八世紀に活躍した神秘主義者、ダマスコのジョンの作品とされてきている。しかしギリ

シャ語のマヌスクリプトにも二十種類あり、どれが最古のものか判明しない。いずれかの奥付けに John the monk と見えることからダマスコのジョンに帰せられ、彼の作品集に収められたのである。それ故、ギリシャ本の訳者に関しては論争中であるが、ダマスコのジョンを否定する H. Zotenberg 氏に対して G. R. Woodward, H. Mattingly の両氏は反対を唱える。Franz Dölger 氏も同意見であるがその説に矛盾があることを D. M. Lang 氏等が指摘する。現在の段階ではダマスコのジョンを否定する側が有力に見える。

それとは別に、S. Nutsubidze 氏は次のような説をたてる。即ち、グルジア本の《バルラームとヨサファート》である《The Balavariani》は七世紀のビザンチン帝国の作家 John Moschus の作品であり、彼の姓である Moschus はグルジア人を意味する Meshki に通ずる名であるから彼がグルジアとギリシャの二本の著者であるという。

尚、筆者自身看過できず、理解困難な点はギリシャ本の訳者が「これは印度人の国と呼ばれるエチオピアの奥地から伝えられた信頼すべき記録に基いて翻訳した。」と記している事実である。この点に関する言及はどの論文にも見当たらない。

以上が印度からギリシャに至る経路であるが、最近 K.S. Kekelidze 氏によって注目すべき異説が発表された。

佛伝から基督教聖人言行録に書き換えられた最初は、パーレビ本ではなく次のシリア本である。それには次の様な経緯がある。五世紀に興ったネストリウスの教義が異端宣告を受けると信者達は東シリア教会へ移って行く。この地域はペルシャの支配下、パーレビ語文化圏に在る。東方ネストリウス教会の印度人の大司教がペルシャの大司教と結んで彼等の教会の独立を守るべくセレウキア・テシフォン[8]のネストリウス教長と闘う。七世紀半ばに新しいネストリウス教長をたてることを建議する。独立の教会として位置づけよという自らの主張を正当化する為には、教会が独自の使徒を有することを証拠だてる文書が必要であり、その証拠となる適当な物語を拵えることが急務となる。同時にネストリウスの教義とは対立するトーマスの教えが印度に広まるのを阻む必要もあって、パーレビ語に訳されていた佛伝に基いてシリア語で基督教のものに書き直したのである。又、アラビア本には二種あり、一方はパーレビ語の佛伝をそのままアラビア訳したもの、他方はそれを基督教化したものであり、それが

グルジア本のもとになっている。以上が K. S. Kekelidze 氏の説の概要である。興味深くはあるが基督教化されたアラビア本とシリア本との関係が曖昧である。

これとは別に D. M. Lang 氏は《Encyclopedia Britanica》に於いて、最初に基督教化したのはグルジア本であり、その成立は九世紀、元になったのはアラビア本であるという。基督教化されたグルジア本をアトスの Euthymius がギリシャ訳し、それがラテン語を初めとするヨーロッパ諸国語に訳され、再びアラビア訳されたとする。D. S. Kekelidze 氏の説ではアラビア語の佛伝がアラビア語で基督教化されてグルジアへ伝わったとなっているが、それでは氏自身の説であるシリア本が基督教化の最初であることとの関係が不明であり、基督教化されたアラビア本がグルジア本の後半を欠いている事の説明もつかない。これらの問題が D. M. Lang 氏の説によれば解決される。

ギリシャ以降の経路は次の様である。

九世紀後半法王の図書係を勤めた Anastasius がギリシャ本からラテン訳したとされているが、ギリシャ本の訳者が仮に Euthymius であればその成立は十～十一世紀初頭である。従って Anastasius の翻訳は不可能となる。これについて P. Peters 氏はラテン本成立は一〇四七年秋以後、訳者はアトスのアマルフィ僧院の Leo というラテン人聖職者の仕事を誰かが引き継いで完成させたという。R. Manselli 氏も一〇四八年以後ヨーロッパに広まったという。ともかくこのラテン本が元になってヨーロッパ諸国に伝えられた模様である。

十三世紀にラテン本から三種類のフランス訳がなされいずれも韻文である。その一つプロヴァンス本からイタリア訳されたのが十四世紀初頭である。十五世紀末ラテン本からのドイツ訳がアウグスブルグで出版され、イギリスでも同じ頃ラテン本《Legenda Aurea》から William Caxton が英訳している。この他ラテン本からは一五九三年プラハでボヘミア本が、一六〇八年にはマドリードでスペイン本が、一六八八年にはクラコウでポーランド本が夫々成立している。アイスランド本、スウェーデン本はドイツ本によっている。又、ノルウェイでは一八五一年に十三世紀初期のベラム・マヌスクリプトに基いて出版されている。

《バルラームとヨサファート》はこうしてヨーロッパ各地に広められたのみならず我が国にも伝わっており、天正一九年(一五九一年)加津佐学林から刊行された《聖

徒の御作業の内抜書》[9]の第三番目に《聖ばるらあんと聖じょざはつの御作業》として著わされている。《聖徒の御作業目録》によれば、巻第一、十六番目に「尊きConfessores S. Barlan と S. Iosaphat の御作業。是 S. Joan Damasceno の記録に見えたり」と記されている。又巻第一、十七番目の終りに「右二ツの御作業は Irman Jofo Paulo の翻訳なり」と記されている。

一五八九年基督教禁止令が発令され、続く一五九〇年には印刷術が伝来している。その翌年に本書は出版されている。その間に相当の経緯があったであろうことは想像に難くない。さて邦訳はギリシャ本の十分の一にも充たない短いもので、大意の要約程度のものである。しかしギリシャ本は主にバルラームの会話の中で基督教の教義や聖書からの引用を豊富にしかも繰返し用いているので実際の物語の筋は決して長くはない。邦訳はこれを殆ど省略又は短縮しているので却って読み易く、要約ではあるが文学的価値を失っていない。ギリシャ本と比較すると極めて忠実に訳した跡が窺われ、用いられた日本語は洗練されている。文中、発心・囲繞渇仰・菩提・無常・本尊・法事・法師・学匠・血気痰水等の単語が散見されることと、無益・智眼・不犯・荘厳・黒白・苦患・奇特・行体功力・褸褐等僅かに施されたルビにも呉音が目立つことから、Paulo の邦訳を更に当時の日本の教養ある人（恐らくは漢訳佛典に通じていたであろう）が手を加えたものと思われる。

アジアに於いては日本の他、フィリピンにも伝えられ、十七世紀中頃までにジェスイット教団の宣教師達が少くとも三種類のフィリピン方言[10]に訳している。

この他、成立年代や伝播の経路の不明なものにエチオピア本、アルメニア本、ルーマニア本、ヘブライ本等がある。

以上が《バルラームとヨサファート》のおよその伝播の経路である。この調査の道すがら興味深い事実が発見されたので主なものを以下に紹介する。

一二五〇年ドミニコ会の修道士 Jacobus de Voragine が《Legenda Aurea》を著わした。これは基督教の聖者伝とその祝祭日についての手短かな論説の集録で、この中にバルラームとヨサファートの伝記が載せられている。又、ギリシャ正教会の聖人祭日暦では、八月二十六日が聖ヨサファートの祭日、グルジアでは五月十九日がその日にあたる。ローマカトリックの修道女の教会では十一月二十七日にバルラームとヨサファートの為の礼拝式が

行なわれる。これと関連して次のような記録が見える。ローマ教皇 Sixtus the Fifth (1585～1590 在位) の殉教録中十一月二十七日の欄に "the holy saints Barlaam and Josaphat, of India, on the borders of Persia, whose wonderful acts Saint John of Damascus has described." という記事が見える。これらによって《バルラームとヨサファート》は虚構ではなく、実在の人物の伝記として受容されてきたことが知られる。更にそれを裏書きする様に、一五七一年ヴェニスの総督がポルトガル王 Sebastian にヨサファートの遺骨と称する背骨の一部を贈呈している。その遺骨は様々の変遷の後、ベルギーのアントワープにある St. Salvator 寺院に現存する。

次にこの物語がヨーロッパ文学に影響を与えたと思われる点を紹介する。

バルラームの語る寓話の一つに次の物語がある。ボロ服の修行僧に丁重に挨拶した王を嘲った貴族達に彼等の非を悟らせるべく王は四つの小箱を用意する。汚物を詰め外側を金で飾りたてた二つと、宝石を納めて外側にピッチやタールを塗りつけた二つを貴族等に価値判断させる。彼等は前者を高価なものと答える。王はその場で箱を開きボロ服の行者は後者の如く、貴族は前者の如くであると論す。

この寓話は直ちにシェイクスピアの《ヴェニスの商人》を思い出させる。即ち富豪の才媛ポーシャが婿選びの為に金・銀・銅の小箱を用意し、銅箱の中に納めたポーシャの肖像を選びあてたバッサニオと結婚する。D. M. Lang 氏はシェイクスピアが《バルラームとヨサファート》にヒントを得たというが、《世界名著事典》[11]によればシェイクスピアは《ローマ人物語》を参照し、この《ローマ人物語》が《バルラームとヨサファート》の影響を受けているという。尚この寓話は《Talmud》[12]の中にも見られ、やはり源は印度にあると云われるが出典は不詳である。佛典中には貧家珍宝蔵・弊物中金像・貧女懐胎聖王等[13]が如来蔵の譬喩として表われている。

次に G. R. Woodward, H. Mattingly の二氏は、物語後半のヨサファートに信仰を棄てさせる手段として美しい乙女に誘惑させる部分はワグナーの《Parsifal》(1882 初演) を思わせると云うが、前述の四つの小箱程の酷似性は認めがたい。更に両氏は、その他沢山の寓話が中世に流行した Morality Play に材料を提供しており、名高い「三人の友を持つ男」の話は《Everyman》に

用いられているという。

D. M. Lang 氏はトルストイへの影響を指摘する。彼の《Confession》(1884) にヨサファートの出家や物語中の寓話の一つを一語一語正確に引用しているという。

以上は影響の顕著な例であるが、この物語のマヌスクリプトが各地に存在することからこの他にも多く見出されるであろう。[14]

最後に伝播の足跡を辿る間に集まったバルラームとヨサファートの異った綴りをまとめると次の通りである。[15]

Sanskrit	Bhagavān	Bodhisattva
Turkish		Bodisav
Pahlavi	Balauvar	
Classical Persian	Bilauhar	Būdisaf
Arabic	Balauhar	Būdāsaf
〃	Bilawhar	Yūdasaf
〃	Barlām	Yuāṣaf
〃	Varlaame	Iosafe
Armenia	Varlaamĕ	Iosafĕ
Georgian	Balahvar	Iodasaph
〃	Balavar	
Greek	Barlaam	Ioasaph
Latin	Barlaam	Josaphat
French	Barlaam	Joasaph
English		Iehosaphat
Ethiopian	Baralâm	Yewâsef
〃		Yêwasêf

《バルラームとヨサファート》が佛典と無関係でないことを示す最も顕著な点は、四門出遊に相当する部分を含むことである。

偶像崇拝者であり基督教徒を迫害するアベナー王の晩年の独り子ヨサファートは誕生の時カルデアの占星家に将来基督教徒になると予言される。王はそれを恐れて王子に立派な宮殿を建て健康な若者のみを周囲に侍らせ、老・病・死等を王子に知らせぬよう命ずる。が王子は長じて幽閉の身を悲しみ王に願って初めて城外に出、奇形者・盲人・老人に出会い人生の苦に直面する。

《Buddhacarita》のこの部分を見ると、シッダールタの誕生の際、アシタ仙人が「彼は王位を棄て凡ての欲境に無関心で精進して真如に達し、愚癡の暗闇を破ろうと智慧の日として輝き渡ろう」[16]と予言する。浄飯王はそれを喜ぶ反面、「然し彼は心が『彼は聖道を行くであろう』との思い

に悩まされた。教法を愛さない思いからではないが、子孫を失う予感に恐れを見出した。[17]」と云い『彼はあるひは何か心乱す快くないものを見よう』こう王は慮って宮殿の内部、人の往来のない地に彼の為に住居を設けた。[18]」と云う。ここまでは略々一致するが、宮殿内の様子が異る。ヨサファートの荘麗な宮殿の住人は悉く男性である。この物語の特徴の一つでもあるが、女性は王子に基督教を棄てさせる最後の手段としてしか登場しない。彼は結婚を拒み生涯独身である。ところがシッダールタの宮殿は媛女等で溢れるばかりであり、彼はとりわけ美しく徳高いヤショーダラーを娶りラーフラをもうける。四門出遊後媛女達の睡態に嫌悪を感じて出家の決心を強めたと書かれてはいるが、ここに登場する女性は故意に悪しき者として描かれてはいない。《ラーマーヤナ》の女性を形容する美しい文章を連想させる程美しく、稍々理想化されてはいるがなお自然な描写である。夫であり父であるシッーダールタは恩愛の絆を超えて出家するのに対して、ヨサファートは父王を自分の願いを妨げる敵として激しく非難する。同じプロットを辿り乍らこの辺りの相違は看過できない。

城外にて不具者等に出会った時の王子と侍者との会話は《Buddhacarita》の逐語訳と云い得る程酷似している。こうして王子は人生が苦であることを痛感する。釈尊の出家の動機や四聖諦に明らかな様に佛教の出発点は〝苦の認識〟であるのに対して、基督教のそれは〝罪の自覚〟であると言えよう。神は慈愛深く如何なる罪人をも許し給うがそれには悔い改めが絶対条件である。神が裁き手であることは聖書の至る所に見られ、何よりも基督の受難が人間の罪の許しの為であることからして〝罪の自覚〟が重要な出発点であると考えられる。そのような基督教の聖者の求道の動機が〝苦の認識〟であることは、仮にこの物語が佛典と無関係であってもなお、基督教にとって異質であろう。

四門出遊に次いで佛典との関連を指摘したいのは、黒白の鼠の寓話が用いられている点である。

この寓話のギリシャ本の概略はこうである。ユニコンの前で踊っていた人がそれに追われて逃げる途中穴に落ち、幸い途中に一本の木があってそれにつかまる。ところがその木の根もとを黒白二匹の鼠が咬っている。穴の底ではドラゴンが炎を吐きつつ彼を待ち受け、更に彼の足もとにはコブラの頭が四つ影を投じている。その時枝から滴る蜂蜜が口に届き何もかも忘れて夢中でそれを貪

る。バルラームの解説は、ユニコンは死、穴は世間、木は人の命、コブラの頭は四大、ドラゴンは地獄、蜜は現世の快楽を夫々象徴しているという。

この寓話に相当するものは、《衆経撰雑譬喩》《譬喩経》及び《維摩経》の「是身如丘井」の註として《註維摩経》に見える。

これ等は部分的に多少異るが、大意は同一である。ユニコンは経典では巨象・悪象・酔象であり、グルジア本も荒れ狂った象である。いきり立って鼻を高く振り上げた象からユニコンへの連想は強ち不自然ではないが、ここで注目されるのは、後にも触れるように、ギリシャ本は基督教自身のもののように扮飾している気配が感ぜられる。これがその一例である。

次に黒白二鼠は《衆経撰雑譬喩》では二匹の白鼠、グルジア本は黒白二鼠で夫々夜・昼の象徴と解き《譬喩経》と一致するが、ギリシャ本はこの解説を欠く。《註維摩経》の解説は黒月・白月である。コブラの四頭は《衆経撰雑譬喩》《譬喩経》が一致し、いずれも四大を指すが、《註維摩経》は五匹の毒蛇であり五蘊を喩えている。又、蜂蜜の滴は《譬喩経》では五滴とあり五欲を示す。象は無常、井戸は生死、木は命根、龍は悪趣を象徴する。

これらの経典の成立年代は不明であるが、《衆経撰雑譬喩》《註維摩経》の寓話の発端は《譬喩経》のように偶発的ではなく、象に追われる人は脱獄死刑囚であり、脱獄者は象の足で踏み殺されるという法律が執行されるのである。同種の刑罰は《マヌの法典》にも見える。《マヌの法典》[19]の成立も前二百年から後二百年と漠然としており《衆経撰雑譬喩》の成立年代へのささやかな参考にすぎない。又、《維摩経》は約百五十年頃の成立である。その中に「是身如丘井」と短い言葉で示されているのは、この寓話が当時既によく知られていてこれ丈で通じたことを意味するものであろう。

又、《佛遺教経》に「動転軽躁但観於蜜不見深坑」とあり、明本には「喩如一人手執蜜器動転軽躁……」とある。これを直ちにこの寓話に結びつけるには稍飛躍があるが、この寓話が時代的に佛教以前、さもなくば佛教の外から採り入れたであろうことは《註維摩経》の五蘊に相当する部分が他の二本では四大である点から推測できる。佛教の寓話となる以前の原型を《佛遺教経》の一節に窺い得よう。即ち現世の快楽のみに耽溺すれば深坑に陥ると警告したものであろう。

こうして佛典中の有名な寓話がバルラームからヨサフ

ァートに伝えられる。ところでこの寓話の主題は〝無常〟でありやはり優れて佛教的思考である。聖書は〝無常〟という把え方ではなくこの世が悪に満ちている点を強調する。

次に物語中四ケ所にわたって deed, word, thought が並べ挙げられている事が注目される。《ヨハネの黙示録》中神の裁きの場に「死人はそのしわざに応じこの書物に書かれていることに従って裁かれた」[20]とある。バルラームはこれを引用する際にしわざ（works）を deeds and words and thoughts と言い換えている。同様に「不朽真実の裁き手である神は正義の秤で every act, word and thought を秤るであろう。」「word, deed and thought に対して報いがあることは明かである。」「彼らの word, act, thought に於ける全てが彼等の面前に露わになるのである」と語られる。

これらは佛教の身口意の三業を直ちに連想せしめる。土居真俊教授によれば「基督教は本質的には一元論であるが、常に魂が問題にされる。如何なる行為にせよ魂の在り方に従う故に佛教の如く特に身口意の三業を数えあげることはしない」由である。佛典には《法句経》《法集要頌経》等古いものにも見える。ともかく行為を三業に分けて考えることは佛教或いは印度的方法でありそれが一度ならず現れている点で佛典との関連を考えざるを得ない。

更に注意を換起される語句は "the darkness of ignorance", "a dence mist of ignorance" である。《マタイ伝》中「暗黒の中に住んでいる民は大いなる光を見云々」[21]の暗黒は darkness の訳である。著者は地の文中にこの句を「the darkness of ignorance の中に坐っている民に光を与え……」と変形して編み込んでいる。更に異教に没頭する父王にヨサファートは云う。「父上よ、あなたは a dence mist of ignorance に囲まれて微かな光さえも見えない闇の中を手さぐりしながら歩いておられる……。」この部分は《出エジプト記》からの引用と指摘されているがそこにも ignorance は現われない。「創り主なる神を認めること」は基督教の重要な信仰個条であると縷説されており ignorance を神について無知であることと解することも可能である。しかし ignorance は avidyā の訳語であり「無明の闇」という極めて佛教的表現を想わせる。これまで述べてきた佛典との関連性に徴してこれを偶然の一致とは見過し難いのである。

次に王の尊敬する太守が隠遁し引き戻されて王と会見の時、彼は遁世の動機は若い日に心に刻んだ金言であると告げる。それは "The fool images the real thing to be unreal, and mistakes the unreal for the real,..." であり実に《法句経》一―十一[22]と符合するのである。

以上が四門出遊（苦）黒白二鼠（無常）、無明、《法句経》の句等の佛典との関連の顕著な諸点である。

次に「黒白二鼠」に関して触れた如く、ギリシャ本はグルジア本の翻訳であるが、部分的に故意に変えたと見受けられる点が散見される。

先ず、バルラームの住んでいた地名はグルジア本では Saradib でありアラビア語のセイロンを意味する Sarandib の訛ったものである。それをギリシャ本は《創世記》のバベルの塔の物語の舞台であるシナルの地とする。

次にグルジア本はヨサファートの篤信が四方に伝わり遂にセイロンのバルラームの耳に達したというのに対して、ギリシャ本はバルラームがヨサファートの苦悶を知るのは神の啓示によるとする。

類例は続く。アベナー王はバルラームの追跡に失敗し重臣アラケースの師ナコーをバルラームに仕立て、王の側の雄弁家と論争させてナコーにわざと敗北させてヨサファートを改宗させようと企む。グルジア本では王子の親類で秘かに基督教を信ずるバラキアスが王の計略をヨサファートに密告する。が、ギリシャ本ではヨサファートは神の夢告によって陥穽を知る。

更に《民数記》中バラムという人物が登場する。彼はモアブ王バラクにイスラエル民族を呪うよう依頼されてモアブにやってくるが、神に従い却ってイスラエル民族を讃える。これとナコーが王との約束とは裏腹にヨサファートの味方となって基督教を弁護する筋との共通性をギリシャ本は指摘し、更にヨサファート誕生の際のカルデアの占星家をもこのバラムに喩え、暗にバルラームを仄めかしている気配がある。そして《民数記》バラムに関する言及はグルジア本には片鱗もない。尚、ナコーの基督教弁護中、アリスティデスの弁明を引用しているのもギリシャ本のみである。

以上の諸例からギリシャ本の著者はこの物語が外来のものであることは否定しないが、基督教色を一層濃厚にすべく、聖書との結びつけ、護教論の挿入等を試みた形跡が窺われる。

最後に、佛典との影響関係は明かでないがバルラームの語る寓話中〃放蕩息子の譬喩[23]〃がありこれが《法華経》

信解品の〝長者窮児の譬喩〟と酷似する。この物語と直接関係は無いが同一の寓話が聖書にも仏典にも見える例は他にもあり㉔、東西二つの巨峰も麓は同じ大地、相互に何らかの形で影響しあってきたであろうことは想像に難くない。今後綿密に研究されるべき分野である。

註

① John Bunyan(1628～1688): "The Pilgrim's Progress" (1678～1684)

② 20頁の表及び註⑮参照

③ (a)Raoul Manselli: "The Legend of Barlaam & Joasaph in Byzantium and in the Romance Europe." East and West, Vol. VII, pp. 331～340. Roma, 1957.

(b)Ilia V. Abuladze: "Introduction" of "The Balavariani" pp. 19～41

(c)Alfred S. Geden: "Barlaam & Jasaphat" Encyclopedia of Religion and Ethics. Vol. VII, pp. 567～569. T. & T. Clark. Edinburgh, 1908.

(d)T. W. Rhys Davids: "The Barlaam & Josaphat Literature." Buddhist Birth Stories. pp. xxvi～xxli. Trübner & Co. London, 1880.

(e)F. Max Müller: "Migration of Fables." Selected Essays on Language, Mgthology and Religion, pp. 533～547. Longmans, Green, and Co. London, 1881.

(f)David Marshall Lang: "Barlaam & Jasaphat." Encyclopedia Britanica, Vol. III, pp. 167～168. 1963.

(g)D. M. Lang: "Preface of The Balavariani" pp. 9～13.

(h)Rev. G. R. Woodward and H. Mattingly: "Preface" and "Bibliography" of "Barlaam and Ioasaph" by St. John Damascene. pp. vii～xvii.

(i)Joseph A. Slattery: "Barlaam and Josaphat." Collier's Encyclopedia, Vol. III, pp. 61 a. P. F. Collier & Son Co. New York, 1960.

(j)"Barlaam and Josaphat," Chambers Encyclopedia, pp. 696. W. & R. Chambers. London, 1885.

(k)"Barlaam and Josaphat." Nelson's Encyclopedia, pp. 561～562. Thomas Nelson & Sons. London, 1907.

(l)中村元「西洋中世とインド文化」
平凡社雑誌「心」昭和四二年七月号一三三～一四三頁。

(m)村岡典嗣「吉利支丹文学抄」改造社　大正15年。

④ St. John Damascene: "Barlaam and Ioasaph with an English translation by the Rev. G. R. Woodward and H. Mattingly," The Loeb Classical Library. London, 1962.

⑤ D. M. Lang: "The Balavariani (Barlaam and Josaphat) A Buddhist Tale from the Christian East." George Allen and Unwin LTD. London, 1966.

⑥ (a)佛所行讃　国訳一切経・本縁部四・五

(b)平等通昭訳註「釈迦牟尼佛陀の生涯」印度学研究所　昭和四年

(c)衆経撰雑譬喩、大正四・五二二a

(d)譬喩経、大正四・八〇一b
(e)維摩経、大正十四・五三九b
(f)註維摩経、大正三十八・三四二b
(g)大方等如来蔵経、大正十六・四五八a
(h)佛遺教経、大正十二・一一一a
(i)法華経、大正九・十六b
(j)方広大荘厳経、国訳一切経・本縁部九
(k)法集要頌経、大正四・七八一a
(l)友松円諦編著「和漢英巴対照ダンマパダ」真理運動本部昭和三十九年

⑦《アリスティデスの弁明》は Eusebius (260?〜340?) に依れば The Emperor Hadrian (117〜138) に、Rendel Harris に依れば Antonius Pius (138〜161) 宛に書かれた。

⑧ Seleucia, Ctesiphon. ティグリス河を挟んで対置するメソポタミアの古代都市

⑨ 註③(m)吉利支丹文学抄所載

⑩ (一)フィリピンで用いられているスペイン系方言、(二)タガラ語、(三)フィリピンの一方言。

⑪ 平凡社 一九六〇 第一巻二四五頁。

⑫ ユダヤの律法及びその解説書、五百年頃に解明されたバビロニアタルマッドと三七八年頃に解明されたパレスチナタルマッドの二種がある。

⑬ 註⑥(g)大方等如来蔵経

⑭ ウィーン、ミュンヘン、オックスフォード、ハイデルベルヒ、ローマ、フローレンス、ヴェニス、トリノ、マドリッド、エスコリアル宮殿、モスクワ、カイロ、エルサレム、グルジア、アトス等の図書館、僧院、及び大英博物館に所蔵されている。

⑮ Bhagavān が Balauvar へと転訛したのはパーレビ語のgとl、nとrの字形が似て居り、Bodhisattva から Yūdasaf へはアラビア文字のBとyが似て居るためである。註③(e)参照。

⑯⑰⑱註⑥(b)「佛陀の生涯」から引用。

⑲ 田辺繁子訳「マヌの法典」(岩波文庫本) 第八章三十四条、「失れて後(王の従僕によりて)発見せられたる財産は(特別の)役人の保管に委ねられるべし。そを盗みし者捕えられたる時は象によりて殺さるべし。」

⑳ ヨハネの黙示録、二十章十二

㉑ マタイ伝、四章一六

㉒ 以レ真為レ偽、以レ偽為レ真、是為二邪計一。不レ得二真利一。

㉓ ルカ伝十五章十一〜三十二。

㉔ 列王記・上、三章十六〜二十八及びジャータカ五四六—五